

# 「命や絆を大切にする」 宮崎県道徳教育読み物資料集

(児童生徒用)



平成25年3月  
宮崎県教育委員会

※ 表紙の写真は、口蹄疫からの復興を願って、平成22年に西都原古墳群に植えられたひまわりです。

ま え が き く 忘 れ な い そ し て 前 へ く

本県は、平成二十二年度に、口蹄疫や鳥インフルエンザの発生、新燃岳の噴火などにより、大きな被害を受けました。しかし、私たちは、これらの体験を通して、命や絆の大切さについて改めて深く考える機会を得ました。口蹄疫終息宣言から二年が過ぎた平成二十四年八月二十七日には、「忘れない、そして前へ」を合い言葉に、再生・復興の新しいステージに向かって、より力強く前進していくことの重要性を訴える知事メッセージが出されました。

県教育委員会では、今こそ、本県における事例を通して、命を大切にする豊かな心やふるさとを愛する心、地域課題の解決に参画する意識や態度を育む教育を充実させる必要があると考えました。

そこで、県民の体験したエピソード等を題材として、本県でしか作成できない道徳教育読み物資料集をつくり、県内の、小・中・高等学校、特別支援学校等に配布することで、児童生徒の感性に訴え、一人一人が人間としての生き方について深く考えることができる授業を支援することとしました。

編集にあたっては、「生命尊重」「友情・助け合い」「思いやり・親切」「郷土愛」「自然への畏敬の念」「人間愛・思いやり」「奉仕・公共の福祉」「不撓不屈」などの道徳的価値に関わる題材を、児童生徒の発達の段階に応じて、十五編作成しました。

十五編のうち二編は、県内の生徒が体験し感じたことを綴った文章を素材とし、若干改変したものです。その他は、実際に取材した事例に、それぞれ必要なフィクションを加えたものになっています。それは、授業で活用する際に、児童生徒の感性に訴え、悩みや葛藤等の心の揺れ、人間関係の理解等の課題について、より深く考えることができる読み物資料にしたいという思いからです。

道徳教育は、児童生徒が人間としての在り方を自覚し、人生をよりよく生きるために、その基盤となる道徳性を育成しようとするものです。小・中学校や特別支援学校小・中学部等においては「道徳の時間」を中心に、高等学校や特別支援学校高等部等においてはホームルーム活動などで、それぞれの学校の実態や方針に沿った道徳教育が行われていることと思いますが、本書の趣旨を理解いただき、ぜひ指導計画に本書の活用を組み込んでいただくようお願いいたします。

最後に、本書の作成にあたって御尽力いただいた方々、取材や資料の提供に御協力いただいた方々、その他多くの関係の皆様、心よりお礼を申し上げます。

平成二十五年三月

宮崎県教育庁学校政策課長 西立野 康弘

## 目 次

	資 料 名	ページ	主な対象*	味わいとする主な価値	関連する主な価値
1	しんもえだけ	1	小学生 (低学年)	生命尊重	動植物愛護 郷土愛
2	かずくん げんきをだして	5	小学生 (低学年)	友情・ 助け合い	生命尊重 動植物愛護
3	ありがとう ふうた	9	小学生 (中学年)	生命尊重	動植物愛護 感謝
4	おばあちゃん はじめまして	13	小学生 (中学年)	思いやり・ 親切	勇気 尊敬・感謝
5	希望の子牛	17	小学生 (高学年)	生命尊重	思慮・反省 家族愛
6	肉の灰干し	21	小学生 (高学年)	郷土愛	創意・進取 社会奉仕
7	あかね てっぺんとったぞ	25	小学生 (高学年)	不撓不屈	家族愛 郷土愛
8	口蹄疫を乗り越えて	30	中学生	生命尊重	向上心 社会の秩序
9	ミヤマキリシマ	34	中学生	自然愛・ 畏敬の念	家族愛 郷土愛
10	べアなんだから	38	中学生	人間愛・ 思いやり	自他の尊重 寛容の心
11	共に生きるということ	43	中学生	奉仕・ 公共の福祉	感謝 社会連帯
12	父の思い	46	中学生	郷土愛	役割と責任 家族愛
13	農業高校生奮闘記	50	高校生	生命尊重	理想の実現 感謝
14	今、あなたにできること	55	高校生	奉仕・ 公共の福祉	思いやり 役割と責任
15	ダブルプレー	60	高校生	郷土愛	信頼・友情 役割と責任



あつというまに、そらが、うすぐらくなり、あめだまぐらいの  
ごつごつした いしが ふりはじめました。

こうたは、いそいで、いえの なかへ にげこみました。  
まどの そとは、みるみる はいいろに そまって いきます。

こうたは ふと、あの えさおきだいを  
おもいだしました。

「めじろたちは、どうしたかなあ・・・。」

しばらくすると、ふっていた はいが  
やんだ ように みえました。

そこで こうたは、いそいで  
あの えさおきだいに 行って みました。



「あっ たおれている。はいに うまっている。」  
こうたは、かけよって、その えさおきだいを  
もちあげて みました。

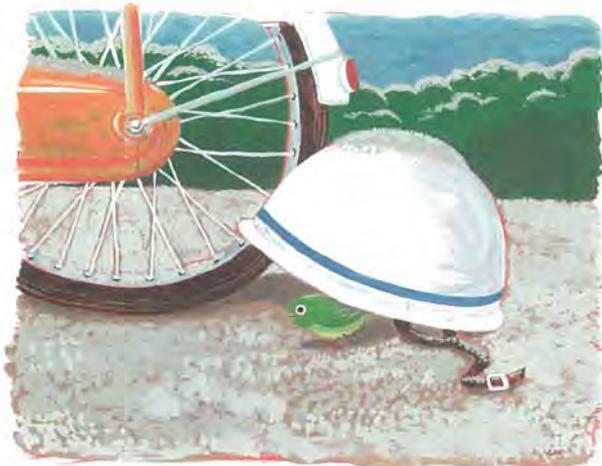
「いない！ めじろは、どこだろう・・・。」

こうたは、どきどきしながら、まわりを みまわしました。  
すると、じてんしゃの そばに おかれていた へるめつとヘルメットの  
なかから、ちいさな なきごえが しました。

そつと ちかよって みると、

ヘルメットの ふちから、あの めじろが、  
げんきな かおを のぞかせています。

こうたは、その すがたをみて、ほっとしました。



しんもえだけは、そのあとも、二<sup>に</sup>ど、三<sup>さん</sup>どと ふんか しました。

それから なんにちか たって、  
がっこうに いくと、ヘルメットが  
よういされて いました。

「みなさんの あたまを

まもるためです。」

せんせいが、そう いいながら、  
ひとりひとりに、かぶせて  
くれました。

こうたは、その ヘルメットを かぶったまま、  
まどの そとの しんもえだけを じっと ながめていました。



## かずくん げんきをだして

かずくんは にわとりの ぴいを かっています。  
がっこうから かえると、まいにち いえの そばの  
はたけに ぴいを つれていきます。ぴいは、  
かずくんの あとを ついて いきながら、じめんを  
つついています。かずくんは、そんな ぴいが  
だいすきです。

ある くもりぞらの ひでした。かずくんが がっこうから  
かえると、すぐに おかあさんが かけよって きました。

「かずくん、ぴいの ことで はなしが あるの。よく きいてね。  
ちかくの ようけいじょうで とりの びょうきが





はっせいしたの。この『とりインフルエンザ』<sup>いんふるえんざ</sup>というのは  
たいへんなびょうきのよ。ほかのとりにうつりやすいので、  
ぴいもびょうきになるかも・・・。  
もしかしたらひとにもうつるかも  
しれないから、かずくん、しばらくは  
ぜったいぴいのところへ  
いってほだめよ。」  
そとはいつのまにかあめになっていました。



かずくんはそのひからぴいのことがきに  
なってしかたありませんでした。そのため、  
そとにあそびにもいかず、はながかりの  
しごとをわすれてしまうこともありました。

そんな かずくんの ようすを みていた しょうくんが  
はなしかけてきました。

「かずくん、どうしたの。ドッ<sup>ど</sup>ジ<sup>じ</sup>ボ<sup>ぼ</sup>ール<sup>る</sup>にもこないし、なにか

あったの？」

かずくんは めに なみだを

うかべて ぴいの ことを

はなしました。

「そうなんだ。それは しんぱいだね。」

しょうくんは じっと かずくんを

みて、はなしを つづけました。

「だけど、きっと ぴいは だいじょうぶだよ。げんきを

だしてよ。そんな かずくんを ぴいが 見たら

かなしおよ。」



それから しょうくんは、かずくんを よく ドッジボールに  
さそったり、はなの みずやりを てつだったりして、その  
たびに かずくんを げんきづけました。かずくんは しだいに  
しょうくんと いると、こころが かるく なるような きが  
しました。

それから いっかげつ たつと 「とりインフルエンザ」は  
おちつき、かずくんも ぴいの ところに いける ように  
なりました。

はれやかな そらの した、こんどは  
なかよしの しょうくんと、だいすきな  
ぴいで おもいきり あそびたいと  
おもう かずくんでした。



## ありがとう ぶうた

「たかひろ、今日あたり生まれるぞ。」

ぼくは、父さんに、生まれてくる子ぶたの中から一頭をまかされて、世話せわをすることになっている。もう、生まれたころかな。そう思うと、学校のべん強も手につかない。

「ただいま、父さん。」

いきをはずませながら帰ってきたぼくは、すぐに豚舎とんしやに行ってみた。すると、まだ目のあいていない小さな子ぶたが、お母さんぶたのおちちにひっついていている。ぼくは、そうっと子ぶたをさわってみた。あたたかくて、やわらかくて、思わずだき上げた。それが、「ぶうた」とのはじめての出会いだった。

その日から、ぼくは、ぶうたの世話をはじめた。ミルクをやったりふんをかたづけたりした。のこくずのふとんもしいてやった。はじめは、遠くからぼくのことを見ていたぶうただったけれども、日がたつにつれて、ぼくたちは、なかよしになっていった。学校から帰ってくると豚舎のさくにはりついて「ブヒブヒ」と、ぼくをよぶ。そうじをしていると、ズボンのすそをひっぱって、あそぼうって顔をする。

そのたびに、ぼくは、ぶうたをぎゅっとだきしめた。





四月のある日、父さんが、

「近くで口<sup>こう</sup>ていえきが出た。」

と言った。

口ていえきとは、牛やぶたなどのびょう気だ。ほかの牛やぶたにうつりやすく、それをふせぐためには、牛やぶたなどをころさなければならぬそうだ。ぼくは、ぶうたのことが心ばいになった。

父さんと母さんは、何回も豚舎のしょうどくをしたり、外へ出かけないようにしたりして、じゅうぶん気をつけていた。ぼくも、

「豚舎へは近づくな。」

と言われた。だから、ぼくは、毎日、ぶうたに聞こえるように

「ぶうた。」

って、大きな声でよんだ。

父さんがなんだかくらい顔をして電話をしていた。母さんに聞いても答えてくれない。その日の夜、父さんが

「ぶたを処分しゅぶんしなければならなくなった。」  
と言った。ぼくは、

「ぶうたは、口ていえきにかかっていないよ。ころさないで。」

となんどもなんども言った。なみだがあふれて止まらなかった。ぶうたとの思い出が頭の中でぐるぐる回っている。父さんは、くちびるをぎゅっとかみしめて、だまったままうつむいていた。

つぎの日、白いふくをきた人がおおぜいやって来た。ぼくは、朝ごはんも食べずに、ふとんに入ったまま、うずくまっていた。何もする気がおこらない。そのとき、ぼくの耳にとびこんできたぶたたちの鳴く声。こんな声、はじめて聞いた。ぼくは、へやをとび出し、母さんにだきついた。

母さんは、目をまっ赤にして

「みんな、ごめんね。」

とつぶやいた。



数か月後、口ていえきはおさまった。

ぶうたたちのおはかの前で、父さんが、

「ぶうたたち二十九万頭の命いのちが、たくさんの牛やぶたの命をすくったんだよ。みんな、ありがとう。」

と言って、手をあわせた。

ぼくは、おはかのまわりに、ひまわりのたねをそうっとまいた。

あれから一年がすぎ、からっぽだった豚舎にぶたがもどってきて、ぼくのうちは、少しずつにぎやかさをとりもどした。そして、きのう、新しい命がたん生した。ぶうたにそっくりのかわいい子ぶたが生まれた。

ぶうた。ぼくは、きみにどうしてもつたえたいことがあるんだ。

ぼくは、ゆっくり、心をこめて手紙を書いた。

まどの外のひまわりが、気持ちよさそうに風にゆれてるのをながめながら。



## おばあちゃん はじめまして

「住民のみなさん、ひなんしてください。きけんです。早くひなんしてください。」

ひなんする指示が出され、ゆみこの家族は、急いで近くのひなん所へ向かうことにしました。そこには、きんちようでこわばった表情の人々が、着の身着のまま次から次へと集まってきました。

あの美しかった山は、黒い煙をもくもくとあげ、不気味な地ひびきはいつまでも続いていきます。

「お母さん、寒くてこわいよ。」

「大丈夫よ、ゆみちゃん。お父さんお母さんがついてるから心配ないわ。お母さんがだっこしてあげるからね。」

しばらくの間、ゆみこはお母さんにだっこしてもらうことにしました。少しふるえていたゆみこもずいぶん落ち着いてきました。



「ドゥン。」

また、ふん火です。いつまでもふん火や地鳴りの音がおさまるところはなく、夜もねおれない日々が続いています。そんな中、

「母さん、ゆみこをたのおよ。」

そう言って、父は出かけていこうとしています。

「お父さん、こわいからそばにいて・・・。」

ゆみこがお願いをしても、父は、出かけていくのです。

「お母さん、どうしてお父さんはそばにいてくれないの。」

ゆみこたちの隣には、一人のおばあちゃんがしょんぼりとすわっていました。ゆみこは、そのおばあちゃんをしばらく見つめていましたが、ふとそのおばあちゃんと目が合ったとき、目をそらしてしまいました。

その日からしばらくの間、ゆみこの家族三人は、地域のひなん所で生活することになりました。



「お父さんは、消防団に入っているから、みんなの安全を守るために見回りをしているのよ。」  
「ふうん。」

ゆみこは、小さな声でつぶやきました。

次の日、ゆみこは、二人の高校生のお姉ちゃんたちが、おじいちゃんやおばあちゃんたちにごはんを運んだり、声をかけたりしている姿を見かけました。あのおばあちゃんも、この前の表情とはちがいで、とてもにやかな顔をしていました。ゆみこは、

「お姉ちゃんたち、どうしてここに来てくれるの。」  
と聞いてみました。

「おじいちゃん、おばあちゃんを元気にしてあげたいからよ。私たちにできることってこんなことぐらいしかないじゃない。」

笑って、お姉ちゃんたちは答えてくれました。

その笑顔が目に焼きついてはなれませんでした。



その夜も、ゆみこの父は、見回りに出かけて行こうとしています。でも、ゆみこは引きとめようとはしません。

「お父さん、がんばってね。でも、気をつけてね。」

ゆみこがお父さんに声をかけると、お父さんは、真ま新あたしい白いタオルを出して、ゆみこの首にかけてくれました。

父を見送みおくった後あと、白いタオルをにぎりしめたゆみこは、思い切ってあのおばあちゃんのところに行き、声をかけてみました。

「おばあちゃん、はじめまして。わたし、ゆみこっていのの。」

おばあちゃんとしばらくおしゃべりをしたゆみこは、真まっ赤あかな顔かほをしたまま少し外に出てみました。外に出ると、ふだんは冷つめたく感かんじる風かぜが、なんだか心こころ地ちよく感かんじられました。



## 希望の子牛

これは、山間の小さな村の、口蹄疫の影響を受けた一軒の牛を飼う農家のお話です。

わたる君は、おじいちゃんとおばあちゃんの家の隣に住んでいます。わたる君のおじいちゃんとおばあちゃんは、飼育している牛に田の畦や土手の雑草、薬草などを食べさせ、その牛のふんから作った堆肥を、また畑にまいて作物をつくる、いわゆる循環型の中山間地農業をして暮らしていました。だから一緒にいるひいおばあちゃんも時々散歩としては、草を摘み取って、牛にあげるのが日課でした。もちろん、わたる君も毎日学校の帰りに草を取り、走って帰ると、すぐに牛に食べさせ、それから友達の家へ遊びに行くのでした。

ある日、わたる君が給食当番のお世話で一年生のクラスに行った時のことでした。同じ地区に住む一年生のしょう太君が泣いていました。わたる君が、「どうしたの？どうして泣いているの？」





と聞くと、しょう太君は

「おじいちゃんが牛を遠くへやるって言うんだ。」

と言うのでした。しょう太君とは同じ地域ちいきに住んでいるので、わたる君はしょう太君の家で飼っている牛のこともよく知っていました。

だから、理由たしを確かめたくて仕方ありません。放課後チャイムが鳴ると同時に、急いで駆け出しました。

うちに帰るとすぐにおかあさんに、

「おかあさん、どうしてしょう太君のところの牛がいなくなっちゃうの？」

とたずねました。おかあさんは、

「どうしてだろうね・・・。」

と言って下を向き、それ以上は語ろうとはしませんでした。そこで、わたる君は、今度はおばあちゃんの所へ行ってたずねました。すると、

「わたるちゃん、よくお聞き。おばあちゃんの家の牛も遠くへ行ってしまったとよ。どうしようもなかったとよ。」

と、涙まじりの弱々しい声で言いました。わたる君は、

「何でそんなことするとね。ひどいがね。おじいちゃんもおばあちゃんも、もう好かん。」とおばあちゃんの家を飛び出していきました。

その夜、わたる君は晩ご飯を一口も食べませんでした。それを見ていたおかあさんが、わたる君の部屋に来て、一通の手紙を見せてくれました。それは、おばあちゃんが新聞社にあって書いた手紙の下書きです。おかあさんは、本当のことをわたる君に伝えるため、おばあちゃんの手紙を読んであげることにしたのです。

わたし達は、山間地で牛を飼いながらずっと暮らしています。父が死んだ時、生活も苦しかったのでもう牛飼いはやめようかと思いました。でも何とか主人といっしょに数頭ずつ増やしていき、やっと十頭まで増やしてきました。九十歳になる母も、田の畦の草を一握り持って帰り、牛にあげていました。六年生になる孫も毎日草を持って帰って牛たちにあげてくれます。ですから、口蹄疫から他の牛たちを守るために牛を処分したことは、母にも孫にもまだ言っていないです。この山間地で暮らすわたし達にとって生き甲斐である牛を処分されたことは、日本の畜産を守るために涙をのみますが、どうか牛を飼うわたし達の心情をみんなにもわかってほしいと思います。



おばあちゃんの手紙の最後の方は、涙で文字がにじんでいました。

わたる君も聞きながら涙がたくさんこぼれました。そして、おばあちゃんに言ったことを後悔こっかいしていました。

それから一年後、わたる君のおばあちゃんの家では、また牛を飼いはじめました。そして、その牛も大切に育てていきました。

ある日、わたる君が学校から帰ると、おかあさんが、

「おばあちゃんの家で、子牛が生まれたそうよ。」  
と教えてくれました。

その話を聞き、わたる君はおばあちゃんの家きゅうしやの牛舎ぎゅうしやに駆けつけました。子牛は生まれたばかりだというのに、もう立ち上がろうと必死に足をふんばっていました。その様子を見て、わたる君も、思わずギョツぎょつと拳こぶしを握にぎりしめました。

その次の日、おばあちゃんにわたる君に子牛の名前を付けさせてくれました。

わたる君はいろいろな思いをいっぱい込めて、その子牛に「希望」という名前を付けました。



## 肉の灰干し

平成二十三年一月、約三百年ぶりに霧島山きりしまやまにある新燃岳しんもえだけが爆発はくはつ的なふん火をした。そのえいきょうで、都城市や高原町は一面が火山灰でおおわれ、飛んできたふん石でこわれた家や車も多くあり、農作物の被害も大きかった。火山灰は遠く宮崎市や日南市にまで降りそそいだ。高原町の人々も不安でぼうぜんとした。特に、火山灰をどのように処理しゅりすればいいのか途方とほうにくれていた。

このようなときに、高原のためにがんばろうとする人がいた。谷山さんだ。

谷山さんは、三年ぐらい前からNPO法人をつくり、多くの人の相談にのったりしていた。

平成二十三年三月、谷山さんは東京からやってきた大学の先生に火山灰の有効な活用方法を習った。それは、灰と灰の間に魚を入れて干すことで魚のうまみを出して、特産品にするという方法だ。すでに、東京都三宅島みやけじまの火山灰で灰干しした魚が人気を集めているということだった。谷山さんは、その魚の灰干しを試食ししやくしおいしさを確かめた。



谷山さんは、この方法を高原町の火山灰でも利用できないかと考えた。いったい何を灰干ししたらよいのか、とてもなやんだが、大学の先生のすすめもあり、肉にすることに決めた。

その後、谷山さんは肉の灰干しの研究所を立ち上げた。地元の肉屋さんも賛同して協力してくれた。

ぶた、とり、しか、いのししの肉を使って灰干しに挑戦した。研究を続けていくうちに、肉のくさみがとれ、やわらかく、おいしい灰干しを作る方法を見つけることができた。

「これはうまい。いけるぞ。」  
と、みんなで強くあく手を交わした。

谷山さんは、これを商品化し成功させるには、多くの火山灰が必要と考え、火山灰を八百キログラム集め回った。そして、集めた灰をきれいにするために水であらい、ふるいにかけて、全身灰だらけになりながらきれいな灰をつくった。

そしてついに、谷山さんたちは、高原町で肉の灰干しの試作品の発表会を行った。

ようやくこぎ着けた試作品を口にした参加者は、

「これはおいしい。」

「これなら特産品として売り込むことができるぞ。」  
と、口々に言った。



今まであまり関心を示していなかった人々も、

「灰干しはうまくいっていますね。がんばってください。」

「うちにも灰があるよ。」

などと声をかけたりしてくれた。

谷山さんは試作品の発表会がいろんな意味で成功したことを感じた。

谷山さんは、さらに、町のイベントで肉の灰干しを発表するとともに、だれでも作ることができるようにマニュアルも作った。

ある日、高原を元気にしたいという強い思いをもつ町内の若者が、肉の灰干しを活用して、お店を始めたいと言ってきた。谷山さんは、その若者に灰干しの製法を喜んで教えた。

この若者は、平成二十四年五月に肉の灰干しの店を始めた。

その後、この若者をはじめ肉の灰干しを六つのお店で扱ってくれるようになり、いろいろな人に、肉の灰干しに興味をもってもらえるようになった。





谷山さんは、その後も、高原のためにできることは何かを考え、「小・中学生を対象にしたマグマや火山灰の研究会」、「肉の灰干しのバーベキュー大会」などを計画し実行した。

あるイベントの会場で、地元のマスコミから「どうしてこのようなイベントを計画したのですか。」というインタビューを受けている谷山さんを見かけた。

照れながら答える谷山さんの周りには、地元の子どもたちの笑い声ひびが響ひびき、たくさんの笑顔がきらきら輝かがやいて見えた。

## あかね てっぺんとつたぞ

五年に一度開催される「全国和牛能力共進会」が、平成二十四年十月に長崎県で行われた。出場した宮崎県代表は、全九部門のうち五部門で日本一となり、前回の鳥取大会に引き続き、二大会連続で総合日本一に輝き、口蹄疫からの復興と畜産王国宮崎を全国にアピールした。

第三区（若雌の2）で見事日本一になった都農町の永友浄さんも、その代表の一人であった。永友さんは、十五年前の岩手大会でも日本一になるなど、過去にも輝かしい成績をおさめている。しかし、今回の日本一獲得までの道のりには、これまでとは違う様々な苦難があった。

永友さんの孫娘で、宮崎市に住んでいたあかねさんは、バレーボールが大好きながんばり屋だった。

「わたしはバレーボールでトロフィーを取るから、おじいちゃんは牛で取ってね。」

あかねさんはこう言いながら、牛の日本一を目指す永友さんをいつもはげましていた。

ところが、五年前の平成十九年四月、元気で明るかったあかねさんが、事故で急に亡くなってしまった。十一才だった。

永友さんは悲しみをこらえながら、あかねさんとの約束を果たそうと数か月後の鳥取大会にのぞんだが、あと少しのところまで日本一をのがした。

さらに、三年後の平成二十二年には宮崎県で口蹄疫が発生した。永友さんは、

「これでもし、うちの牛が口蹄疫に感染したら、もう牛を飼うのはやめる。」

という覚悟で徹底的に毎日消毒作業を行ったが、毎朝牛舎に牛の様子を見に行くのはとてもこわかった。

そんな必死の消毒作業のきもなく、ある日一頭の牛の口から、泡状のよだれが出ていた。感染したのだ。ショックだった。一生懸命育ててきた三十九頭の牛は、すべて殺処分された。永友さん一家は、それから一週間は感染の拡散を防ぐために、家から全く出られなかった。放心状態の日々がしばらく続いた。

しかし、永友さんとはかく前向きになろうと気持ちを切り替えた。自分が落ち込んでいては家族が元氣にならないし、殺処分された三十九頭の牛たちにもうしわけないと考えたからだ。そして何より永友さんを奮い立たせたのは、あかねさんと交わした約束だった。

「もう一度全国和牛能力共進会に出よう。そして、てっぺんをとろう。宮崎県のために。都農町のために。そして、あかねとの約束を果たすために。」

それから永友さんの再挑戦が始まった。

毎朝五時半に牛舎に行き、ふんをかた付け、えさを与える。夕方には、牛の体を引きしめるために造った運動場を、牛の息づかいを感じながらいっしょに二十周ぐらい歩く。朝晩二回のシャンプーや寝る前の

念入りな全身マッサージも欠かさない。

家族や地元の農協の畜産技術員などの信頼する仲間と、時間を惜しまずできる限りの努力をした。

永友さんの長男で、あかねさんの父、泉さんからの年賀状には、

「長崎での大会は貴方にとって集大成です。あかねとの約束の場所だと思っています。」と書かれてあった。あかねさんからも励まされているように感じた。

永友さんは、自分の畜産人生の集大成として、日本一になるという目標を実現するためには、さらに自分を追い込む必要があると考え、地区の審査会の時に、

「てっぺんしかない。必ず日本一になる。」とみんなの前で宣言した。

地区の審査会を順調に突破し、県の代表を決める審査会に進んだ永友さんだったが、県の審査会前の一週間は眠れなかった。何度も県代表になったことのある永友さんでさえ、レベルの高い宮崎県の審査会は大きなプレッシャーだった。しかし、重圧を背負ってなお、大舞台ですべてを出し切れるよう、牛の調教にも多くの時間を使って努力してきた永友さん。見事、県代表の座を勝ち取った。

それから二ヶ月後、いよいよ長崎での全国和牛能力共進会の日がやってきた。永友さんは、日本一連覇

を目指し固い結束力でまとまった「チーム宮崎」の一人として会場にいた。審査結果のアナウンスを待つ永友さんは、ズボンのポケットに入れたあかねさんの写真をずっと握りしめながら、

「きっととれる。」  
と確信かくしんしていた。

「優等賞ゆうとうしょう主席しゅうせき、宮崎県、五十八号。」

「よーっしや、やったぞ、あかね。」

永友さんは、右手で力強くガッツポーズをした。そして、その手で静かに涙なみだをぬぐった。

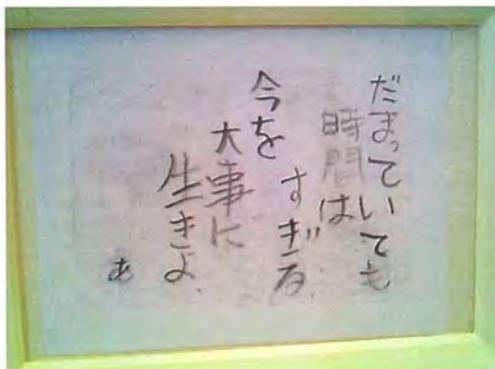
宮崎にもどった永友さんは、さっそくあかねさんのお墓の前で、日本一の報告をした。

「あかね、約束どおり、てっぺんとったぞ。じいちゃん、いろいろつらかったけどがんばったぞ。あかねが勝たせてくれたんだろ。いや、あかねだけじゃない。周りの仲間やその他のみんなのはげましや協力があつたからかもしれないなあ。これからは、その恩おんを返すためにも、若い人わかに自分のやってきたことを伝え、後継者こうけいしやを育成していきたいと思っているよ。これからもじいちゃんはがんばるから見守っていでくれな。」





牛舎には、今日も牛の世話に汗を流す永友さんの姿があります。  
その永友さんの家には、生前あかねさんが紙に書き記しるしていたことばが、  
額がに入れてかざってあります。



## 口蹄疫を乗り越えて

中学校へ入学して間もないその日、恵子は朝から落ち着かなかった。いつもなら登校するとすぐに盛り上がるクラスメイトのおしゃべりも、気が乗らない。

「どうしたの恵子。今日はなんだか元気がないね。」

心配して顔をのぞき込む友達の有香に、

「ちよっとね……」

とだけ答えると、恵子はそっと自分の席についた。昨日見たニュースと父母の顔が交互に頭に浮かぶ。恵子は不安で胸がいっぱいになった。

「宮崎県で口蹄疫の疑いのある和牛三頭が確認されました。」

四月二十日の夕方。恵子が学校から帰ると、両親が食い入るようにテレビのニュースを見ていた。「まさか……」  
「どうしてこんなことに……」父も母も次の言葉を失った。

恵子の家は、六十頭の牛を育てる畜産農家だ。祖父母の代から牛を育ててきた。恵子のアルバムには、牛たちと一緒に撮ったたくさんさんの写真が収められている。恵子が赤ちゃんの頃、祖父に抱かれていた写真にも、小学校に入学して大きなランドセルを背負っている写真にも、後ろの牛舎から、まるで恵子を見守るように見つめる牛たちが写っているのだ。普段、自分から進んで牛の世話を手伝うことはなかったが、生まれたときから牛たちとは家族同然に生活してきた。「もし口蹄疫が広がってしまったら……」そう考えると恵子は気が気ではなかった。学校が終わると、「ごめん。今日は部活休むね。」とだけ有香に伝え、教室を飛び出していった。

家に帰ると、恵子は牛舎にいる父のもとへと急いだ。父はいつものように牛たちに餌をやっていた。

「おお、恵子。お帰り。今日は早かったね。」

変わらぬ父の様子に、恵子はほっとした。

「お父さん、昨日のニュース…。うちの牛たちはだいじょうぶだよね？」  
恐る恐るたずねると、

「もちろんだよ。口蹄疫なんかに大事な牛たちを殺されてたまるか。」  
普段は穏やかな父の表情が急に厳しくなった。

その日からしばらくの間、恵子は学校から帰るとすぐに、カバンを抱えたまま牛たちの無事を確かめるために牛舎へと走った。恵子の姿を見つけると、牛たちはうれしそうに、ひとときわ大きい声で「モオー。」と鳴いた。

「どうかこのまま、今までの生活が続きますように。」恵子は祈るような気持ちだった。

しかし口蹄疫の感染は瞬く間に広がり、全く収まる気配はない。恵子の住む地域でも感染を防ぐために、幹線道路には消毒ポイントが設けられ、学校などの公共施設にも消毒液が準備された。恵子の家でも、必死の防疫対策が始まった。家族は皆、買い物などの外出をできるだけ控え、やむを得ず外出するときは、帰宅後全身に消毒スプレーを浴びた。酢の入った消毒液はツーンと鼻をつく臭いがした。

恵子も学校から帰るとすぐに制服を着替えて、決して牛舎に近づかなかった。これまでは、毎日当たり前のようについていた牛たちと会えない日が、何日も続いた。牛舎から聞こえる牛たちの鳴き声が、いつもより遠く、小さく感じられた。

口蹄疫のニュースが流れて、約二か月が過ぎたある日。学校から帰宅した恵子は、息をのんだ。石灰がまかれ、真っ白になった牛舎が目飛び込んできたのだ。朝、家を出たときは全く違う光景が広がっている。そして何より、いつもなら聞こえてくる牛たちの鳴き声が全く聞こえないことに、恵子の胸はざわざわと騒いだ。

「お父さん、お父さん！」

いても立ってもいられず、恵子は玄関に駆け込んだ。

「牛は？ 牛たちは？」

「今朝、みんな殺処分されたよ……。うちの牛舎でも感染が見つかったんだ……。」

恵子は目の前が真っ暗になった。父の言葉がすぐには信じられなかった。

「なぜ殺さなくてはいけないの？ 何も悪いことなんかしていないのに。家族みんなで頑張ってきたのに。」

一頭でも感染すれば、拡大を防ぐために牛舎のすべての牛を殺処分しなければならぬことを、恵子は十分に分かっていた。それでも、牛たちの命を守りきれなかった悔しきで、恵子の目から大粒の涙がこぼれ落ちた。

「口蹄疫は感染力の強い病気だ。感染が広がれば、もっと多くの牛たちが殺処分されることになる。」

父は静かに、恵子を見つめて言った。

「なあ、恵子。うちの牛もよそ様の牛も、同じように大切な命だ。かけがえのない牛たちを、もうこれ以上一頭だって失いたくないんだよ。」

父の声はかすかに震えていた。先代から受け継いだ六十頭の牛たちは、祖父母の形見であり、家族であり、父の人生そのものだった。その牛たちの殺処分の受け入れを決断しなければならなかった父はどんなにつらかったことだろう。父の気持ちを思うと、恵子はもうそれ以上何も言うことができず、声を上げて泣いた。

それから二年の月日が流れた。恵子は中学三年生に進級した。自宅の牛舎には前と同じように、約六十頭の牛

たちが戻<sup>もど</sup>ってきた。父と母は相変わらず朝から晩まで忙<sup>いそが</sup>しそうだ。以前にも増して牛たちの世話に励<sup>はげ</sup>む二人の姿から、父母の牛たちに対するより一層深い愛情を恵子は感じ取っていた。

「恵子、一緒に帰ろう！」

入学以来ずっと同じクラスの有香とは、学校から帰るのもいつも一緒。何でも話し合える間柄<sup>あいだがら</sup>だ。

「もうすぐ三者面談だね。恵子は、進路どうするの？」

「うーん、悩<sup>なや</sup>んでる。」

三年生になってからは、そんな話題が多くなった。

「今の成績じゃ、難しいんだけど。でもわたし、獣<sup>じゆうい</sup>医師<sup>いし</sup>になりたいって考えてるんだ。」

かみしめるようにそう言うと、恵子は空を見上げた。

雨上がりの澄<sup>す</sup>んだ空に、色鮮<sup>あざ</sup>やかな虹<sup>にじ</sup>がかかっていた。



## ミヤマキリシマ

「カタカタ、カタカタ」新燃岳しんもえだけから五十キロメートル以上離れた宮崎市にある由紀子の家の窓も不気味に揺れた。噴火ふんかの影響えいぎょうだ。いわゆる空振くうしんである。

由紀子の祖父母は、新燃岳の麓ふもとの町で農業を営みながら、ずっと二人で暮らしている。新燃岳の噴火はだいぶ収まってきたし、避難勧告ひなんかんこくも解除になって自宅もとに戻ることができた。それでも由紀子は、新燃岳の近くで暮らす祖父母のことが心配でならなかった。

そんなある日、由紀子は、父親に聞いてみた。

「ねえお父さん。おじいちゃんたち、もう歳としなんだし、この家で私たちと一緒に暮らせばいいんじゃない。新燃岳も、またいつ噴火するかわからないし。」

「そうだなあ・・・。」

父親の返事ははっきりしない。

「ねえ、お母さんはどう思うの。こっちで暮らした方が絶対安全だし、大きな病院やお店も近くて、おじいちゃんたちも安心だと思っただけど。」

と母親にも聞いてみた。

「そうねえ。今度の土曜日に、灰の片付けのお手伝いにみんなで行くでしょう。その時、由紀子がおじいちゃんたちに話してみなさいよ、そのこと。」

土曜日、由紀子たちの家族は、父親の運転する車で祖父母の家へ向かった。いつもなら、鼻歌を歌ったりお菓子を食べたりしながらドライブ気分の由紀子も、この



日は、往来する車がまき上げる灰、道路わきの畑や家々の屋根の上に降り積もっている灰のあまりの凄さに、ずっと黙ったままだった。

「みんな、ありがとう。今日はこれで終わりにしよう。」

「ふーっ。」

祖父の言葉を聞いた由紀子は、腰を伸ばしながら大きく息を吐き、額の汗をぬぐった。

「ありがとな由紀子。おかげでだいぶきれいに片付いた。本当に助かったよ。疲れたじやる。」  
「ううん。部活で鍛えているから、これぐらい大丈夫よ。」

少し張りを感じる腰をおさえながら、由紀子は精一杯の笑顔で答えた。

「それより、おじいちゃん・・・。」

「何じゃ。」

「あの・・・。」

「おじいさん、由紀子。何しているの。お茶が入りましたよ。」

居間から、祖母の声。

「おじいちゃん、あとで。」

「何じゃ、変なやつじゃなあ。」

みななどお茶を飲みながらしばらくとりとめのない話をした後、祖父の方から問いかけてきた。

「そういえば由紀子。さっき何か話したそうじゃったな。」

由紀子は意を決したように正座をし、話し出した。

「おじいちゃんとおばあちゃんに提案があるの。まだまだ噴火も心配だし、宮崎市に引っ越して私たちと一緒に

暮らさない？おじいちゃんたち、もう歳も歳なんだし、大きな病院やお店も近い私たちの家で一緒に暮らしましよ  
うよ。また噴火があるかもしれないし、私、心配なの。」

由紀子の話を聞いた祖父は、しばらくだまったまま天井を見つめている。そんな祖父を祖母や父母はじっと  
見つめている。

祖父は、おもむろに立ち上がると、何やら小さな額に入ったピンク色の花の写  
真を持ってきた。

「由紀子はこの花を知っておるか。」

「きれいな花ね。何という花なの。」

「ミヤマキリシマじゃよ。霧島山など九州各地の高山に自生しておるツツジの一  
種じゃ。今回の新燃岳の噴火による降灰で埋まってしまい、霧島山のミヤマキリ  
シマは絶滅が心配されておるんじゃ。」

「何とか保護できないのかしら。」

「おそらく、そういうことはせんじゃろ。ミヤマキリシマは一メートルほどの低  
木で、火山活動や強風などの厳しい自然環境に適応しながら生きのびてきた植物  
じゃ。逆に環境がよくなって、他の植物が生え始め森林化が進むと生きのびられ  
なくなる。わしは信じておる。根は灰の下で生きておる。ミヤマキリシマはきっ  
と復活するよ。」

「おじいちゃん……。」

「由紀子の提案はとてもありがたいと思う。でも、ばあさんとわしは、これからもここで生きていくよ。今回、  
新燃岳の噴火では大変な目にあっただし、みんなにも心配や迷惑をかけた。自然の脅威の前では人間の力はちっ  
ぽけなもんじゃと改めて感じたよ。しかし、ここの自然、霧島山の豊かな恵みのおかげでわしらはこれまで生き



てこられたんじゃ。あと何年生きられるか分からんが、ばあさんとこの土地で自然と向き合いながら、自然の恵みを感じながら生きていきたいと思う。」

「私も同じ気持ちよ、由紀子。ありがとう。」

由紀子の頬をやさしく両手で包みながら祖母もそう言った。

「やっぱりなあ。」

宮崎市に帰る車中、父親は一言だけつぶやいた。

「それ、きれいなだけじゃなくて、力強い花なのね、由紀子。」

祖父にももらったミヤマキリシマの写真をじっと見つめる由紀子に母親が静かに語りかけた。

「うん。」

そう返事しながら由紀子が霧島山の方をふり返ると、新燃岳の火口から立ち上る火山ガスが、夕日に赤く染められていた。

それから約一年半後、七月十一日の早朝。

「由紀子。新聞、新聞。新聞見てみる。」

父親がめずらしく興奮して、由紀子に向かって新聞を差し出した。

由紀子が思わず握りしめた新聞にはこう記してあった。

『昨年の新燃岳噴火による降灰でミヤマキリシマは全て埋まってしまう絶滅が危惧されていたが、根が残っていたため群生が復活』



## ペアなんだから

「のぞみ、最近調子悪いんじゃない？」

テニス部のチームメイトの指摘は鋭かった。のぞみは、自分たちのプレーに不安を抱えていた。というのも、最近、ペアのゆかりが練習を休むことが多く、お互いの動きを確認しながらの練習が十分にできていないのだ。そんなのぞみとは対照的に、別のコートで練習をしている美紀と恵のペアの動きはいい。のぞみは、何としても中学校最後の中体連の地区大会で、満足のいくプレーをして、県大会に出場したいと思っている。三年生になったころの校内戦では、美紀と恵のペアと常に一番手を争っていた。ところが最近、ゆかりのミスで下級生のペアに負けてしまうこともあるのだ。

「ゆかり、最後の大会なのに、やる気あるのかな。」

そうつぶやきながら、壁に向かって何本もスマッシュを打ち込むのぞみであった。

「このままでは、本番で納得のいくプレーができないかもしれない。」

のぞみは、焦りを感じていた。母親に相談し、二か月前から、部活動が終わった後に、テニスサークルで一時間半ほど一般の人たちと一緒に練習を行っている。このサークルに所属している人は、テニス経験の長い社会人が多く、いろいろなアドバイスがもらえる。技術の向上には申し分ない。今日はその練習の日だ。部活動から帰った後、おやつを食べるのもそこそこに、いつものように、母の車で隣町にあるテニスコートに向かった。ところがその日は、練習場までまだ半分もきていないというのに、車がなかなか進まない。



「お母さん、何で渋滞してんの？もう、練習始まっちゃうよ。」

のぞみは、少しいらいらした口調で母に聞いた。しばらく進むと、防護服に身を包んだ男性が数人、車を一台一台誘導している。渋滞の原因は、口蹄疫の拡散を防ぐために設けられた消毒ポイントによるものだった。通過する車のタイヤを消毒しているのだ。やっと自分たちの車の番が来た。

「練習に遅刻してしまおう。」

のぞみは、車の中で、作業員に聞こえるのではないかというような大きな声で言ってしまった。

中体連の地区大会まで二週間を切った。みんな、放課後になるとすぐ練習に参加するためにテニスコートに集まって来る。のぞみがテニスコートに来たときには、既に三年生が四、五人ほどウォーミングアップを始めていた。

「やっぱりゆかりはまだ来ていないな。」

姿が見えないゆかりに、いらだちを感じた。今日こそはつきり言おう。

「ゆかりのせいで負けるかもしれない。もっと練習に集中してほしい。ペアなんだから、私のことも考えて。」

のぞみは、ゆかりを探しに校舎に向かった。

「あ、ゆかり……。」

職員室に入っていくゆかりの後ろ姿を発見した。「顧問の先生にでも呼ばれたのかな。『のぞみの気持ちを知ってやれ』とか怒られるのかも。」のぞみも急いでゆかりの後ろを追って職員室の前まで来た。出入り口が少し開いていたので、ゆかりと担任の先生が話している姿が隙間から見える。

会話は聞こえなかったが、突然泣き出したゆかりの姿に、のぞみは驚いた。顧問の先生が後ろからやって来

た。先生はすぐに状況<sup>じょうきょう</sup>を察し、

「ゆかりのお母さんの実家は畜産<sup>ちくさん</sup>農家でな、口蹄疫<sup>くつてい</sup>の被害<sup>ひがい</sup>で、飼っていた牛を全部処分することになったそうだよ。ゆかりは、部活動がない日に、時々牛の世話の手伝いをしてきたから、とてもショックを受けているんだよ。そう言えば、口蹄疫<sup>くつてい</sup>が広がる前に、子牛が生まれたって嬉し<sup>うれ</sup>そうに話してたなあ。その子牛も処分されるんだから、辛<sup>つら</sup>くて何も手に付かないようだよ。『みんなには、黙<sup>だま</sup>っていてください』って言っていたけれど、のぞみにはタイミン<sup>グ</sup>を見て話をしようと思っていたところだったんだ。」と静かに言った。

家に帰っても、畜産、消毒、殺処分……、これらの言葉がのぞみの頭の中を何度も回っていた。今までテレビの中だけの出来事だと思っていた口蹄疫<sup>くつてい</sup>が、急に身近なものに感じられた。テレビに映し出された牛の目が、涙<sup>なみだ</sup>で潤<sup>うる</sup>んでいるように見え、その鳴き声が、死にたくないという叫<sup>さけ</sup>びに聞こえた。自分たちが育てた牛を殺処分するということがどれほど関係者にとって辛く悲しいことなのか、初めて受け止めることができたような気がした。

その時、飼い犬のラッキーが甘え<sup>あま</sup>るような声で、「キューン。」と鳴いた。ラッキーは、のぞみが小学校四年生のときの誕生日に買ってもらったミニチュアダックスフントで、家族みんなでかわいがっているペットだ。母が呼んでも来ないのに、のぞみが呼ぶと、どこにいても嬉し<sup>うれ</sup>そうに走ってやってくる。

「散歩に行こうか。」

喜ぶラッキーのくるくるしたかわいい目と、テレビで見た牛の潤んだ目が重なった。



その夜、のぞみは今感じている気持ちを自分なりの言葉にし、ゆかり宛ての手紙を書いてカバンに入れた。

テニスサークルの練習日。道路は今日も渋滞だった。窓の外を見ると、また、防護服を着た人たちが一生懸命に消毒作業をしていた。暑い中の作業は、肉体的にも精神的にもかなりの負担だろう。

のぞみは、この前、自分のことしか考えずに文句を言ってしまったことを後悔した。「この人たちは、何を思っているから作業をしているのだろうか。文句を言われて嫌な思いをすることもあるのだろうか。」などと考えながら、消毒を終えて通り過ぎる瞬間、車の中から頭を下げた。

地区大会まであと、十日。相変わらずゆかりは疲れた表情をしている。声を掛けようとしたが、言葉が声にならなかった。今日の練習相手は美紀と恵のペアだ。美紀の打った切れのあるボールが、のぞみの横をすり抜け、ゆかりの前に落ちてバウンドした。ゆかりは身動き一つできなかった。恵が「ナイスボール。」と言って美紀とハイタッチした。ゆかりの「ごめん。」という声が聞こえた。のぞみは、美紀のプレーを称賛するような部員たちの歓声にかき消されないように、「ドンマイ！」と大きな声で応えた。しかし、ゆかりの動きは明らかによくない。次第にゲーム差が大きくなっていく。試合は、簡単に負けてしまった。コートを出るとき、ゆかりはのぞみの方を振り返らなかった。のぞみは、ゆかりの正面に回り、

「ゆかり、これ読んで。」

そうやって、ポケットに入れていた手紙を手渡した。

いよいよ、大会の日を迎えた。美紀と恵のペアは順調に勝ち進んでいる。自分たちも負けられない。次の試合に勝てば、ベスト四に入る。県大会の切符を手に入れることができるのだ。ゆかりの調子も少しずつ上がってきた。

ている。相手は、前に他の大会で対戦したことがあるペアだった。立ち上がり心配だが、波に乗れば勝てない相手ではない。運命の試合が始まる。

「ゆかりのさっきの試合のレシーブ、最高だったよ。今度は私が決めるから見ていて。」  
のぞみはそう言ってゆかりの肩かたを軽くポンとたたいた。ゆかりは、

「うん。」

とのぞみの目を見て笑った。

太陽の光を受けて、まぶしく光るテニスコートに、二人はゆっくりと入っていった。

## 共に生きるということ

「人は一人では生きていけない」

私は、この言葉が大嫌いでした。母や先生方がこの言葉を使うたびに、「嘘だ。一人でだって生きていける。誰かに支えてもらわなければ生きていけないなんて、弱い人間の言うことだ。」と、かたくなに拒んできました。

そんなある日、私の住む都城市には、新燃岳の噴火により、大量の火山灰が降り注ぎました。周りは一面灰色の世界。私の通学路は、灰で覆い尽くされました。その異常な光景に、私は言いようのない不安でいっぱいになりました。まるで、街中の時間が止まり、世界で私一人だけが取り残されたような感じがしました。毎日のようにその嵩を増す火山灰。そんな生活にようやく慣れたころ、私は通学路で一人のおじさんと出会いました。そのおじさんは、道路に積もった火山灰を、自動車の通る道路の中心から、道路脇へと移動させていました。何度も何度も腰を曲げ、小さなちりとりをいっぱいにしてせっせと運んでいるのです。

自分の土地でもない一般の公道を、本当に熱心に掃除をするおじさん。何のために、誰のためにやっているのか分からないまま、私はただぼんやりと眺めながら、その場を通り過ぎました。





二か月近くがたち、ようやく噴火が収まってきたころ、私たちの学校では、部活動生を中心に、グラウンドの火山灰除去作業がありました。私が所属する陸上部は、体育館周辺の担当でした。そこは火山灰集積場所から最も遠く、何度も何度も火山灰でいっぱいになったバケツを両手に提げ、汗だくになって往復しました。水を吸った火山灰はずっしりと重く、歩くたびに体が左右に振られ、いつの間にか私の手は真っ赤になっていました。けれども、不思議と苦になりません。そればかりか、何ともいえない誇らしげな気持ちでいっぱいになりました。

その日の部活動では、久しぶりに茶色の地面を踏みしめ、みんな練習しました。思いつき走り走れる喜びをかみしめていたその時、私の脳裏に、ふとあの道路をきれいに掃除していたおじさんの姿が思い浮かんだのです。

あの日、熱心に働いていたおじさん。あの時のおじさんも、きっと今の私と同じ気持ちではなかったのでしょうか。今日私がかんばったことを知っている人なんて、ほんのわずかかもしれません。でも、人のために一つのことをやり遂げた私は、とても満足でした。

具体的に誰のためということではなく、ただみんなが過ごしやすいようにと、一生懸命に道路を掃除していたあのおじさんも、きっと満足していたのだらうと思います。

そして、私はこうも考えました。実は、私が気付かないだけで、身の回りには、こんなふうには、知らない人たちの善意があふれているのではないかと。



今まで、私は「人は一人では生きていけない」という言葉に、人間は助け合わなければならぬ弱い生き物なのだ、という印象をもっていました。だから、私一人だけでも生きていけると、反発していたのです。

しかし、この出来事をきっかけに、人は、お互い<sup>たが</sup>が無意識のうちに支え合っているものなのだ、と素直<sup>すなお</sup>に思えるようになりました。「助け合う」「支え合う」ということは、今まで私が考えていたようなことではない、と気付いたのです。

新燃岳の噴火は、私たちに大きな被害をもたらしました。でも、それ以上に、大事なことを私に教えてくれました。

「人は一人では生きていけない」

これが、今一番私が大好きな言葉です。

## 父の思い

誠一の住む町で、高病原性鳥インフルエンザが発生したのは、平成二十三年の冬だった。四年前の平成十九年にも発生し、数万羽の鶏が処分された。平成二十二年には口蹄疫が発生し、牛や豚が処分された。誠一の父は、この町の役場に勤めており、このところ対応に忙殺されていた。

新聞やテレビのニュースでは、「鳥インフルエンザ発生」と連日報道されている。誠一の父は、口蹄疫の時と同じように、毎日誠一が夜寝ている間に帰宅して、朝目覚めた時にはもう出かけているので、ほとんど顔を合わせることはない。殺処分や移動制限区域等の防疫対策など感染拡大防止に関する仕事で、かなり忙しいようだ。新聞にも『畜産王国宮崎の危機』、『どうして宮崎ばかりが…』、『陸上自衛隊に災害派遣要請』などの見出しがどっている。誠一は、テレビのニュースで放映されている自分たちの町の様子を見ながら、大変だなあと思っていた。

誠一は、学校ではサッカー部に所属している。小学生の頃から地域のスポーツ少年団に入り、今ではチームのキャプテンも務めているほどだが、最近では、鳥インフルエンザの影響で練習や試合も中止になっている。春の大会での優勝を目標に、練習にも熱が入り、チームもまとまってきただけに、早く練習を再開したい思いでいっぱいだった。また、今度の日曜日は誠一の誕生日で、新しいサッカー用スパイクを買ってもらおう約束を何か月前前からしており、楽しみにしていた。最近父とは話す機会がないので、母に尋ねてみた。

「お母さん、お父さんは今度の日曜日のこと覚えているかな。」

「どうかしらね、今、お父さんは仕事が大変で、食事をする時間や眠る時間ねむもなかなかとれないくらいだからねえ。お父さんの仕事がゆっくりになってから買ってもらったら？」

「えー、お父さんに言っというてよ。」

ずっと楽しみにしていた誠一は、思わず不満をぶつけた。

土曜日の昼前に父が家に帰ってきた。鳥インフルエンザが発生してから先週まで、休日も対応に追われていて家うちにいることはなかった。最近は、青白く疲れた顔つかをしている。母が突然帰宅した父に、

「あら、今日は早かったわね。」

と聞くと、

「ああ、ちょっと具合が悪くてな。病院に行ってきた。」

と元気のない声で答えた。

「大丈夫？」

母が、心配な様子で聞いた。

「大したことはないよ。疲れがたまっているようだ。昨日もほとんど寝ていないからな。少し寝ればすぐよくなるよ。」

と父は答えると、すぐに着替えて眠ったようだった。

ひと眠りした父は、晩ご飯を食べてから、また仕事に出かけるとのことだった。母は今日はゆっくり休むように話したが、父はもう元気になったから大丈夫だと言い張っていた。

久しぶりに家族そろって晩ご飯を食べながら、誠一は誕生日プレゼントのことを切り出した。

「お父さん、明日はサッカースパイクを一緒に見に行つて、買ってくれる約束だったよね。」

「すまない、誠一。明日は無理だ。どうしても仕事に行かないといけぬ。また今度にしてくれ。」  
「約束だったのに……」

誠一は、父の大変さは分かっていたつもりだったが、納得がいかにずいぶん自分の部屋に引っ込んでしまった。

数日後、父は夕方に帰宅して誠一を久しぶりにランニングに誘った。二人で町の野球場の横まで来ると、  
「少し休もう。」

と言い、近くのベンチに腰を下ろした。誠一も隣に座って息を整えていると、父は話し始めた。

「この野球場はな、父さんの思い出の場所だ。前にも話しただろう。中学校の時、野球をやっていた話。」

「うん。」

誠一は、父から何回もその話を聞いていた。

「あの頃はきつかったけど、今思うとなつかしいよ。監督やコーチの顔、友達の顔もはつきり思い出す。ここだけじゃない。向こうの河原で、夏休みにみんなで花火をしたこともあったなあ。」

父は遠くを見つめながら話していた。

「なあ、誠一にとってサッカーが大切なように、父さんにとってはこの町が宝物なんだよ。どこに行っても胸を張って言える大切なものなんだ。」

誠一は、黙って聞いていた。

「今、この町は大きな危機に見舞われている。養鶏農家はもちろん、たく



さんの人たちが苦しんでいるんだ。仕事でいろいろな人たちと話していると、本当にこれからどうやって生活していくか、不安でたまらない気持ちを抱えている人たちばかりだ。父さんは、宝物をしっかりと守らないといけない。みんなの笑顔を取り戻したいと思っているんだ。」

父の思いが伝わってきた。

春。暖かい日差しが降り注ぎ、桜が満開になった。町では鳥インフルエンザに関するすべての制限が解除された。

「練習に行ってくるよ。」

誠一は真新しいサッカースパイクをバッグに入れて、練習に向かった。

通い慣れた道から見える自分の町の風景。でも、この日の誠一には、いつもと違う風景に感じられた。

## 農業高校生奮闘記

僕はケンシン。現在農業高校に通う三年生で、畜産の勉強をしている。将来は畜産の研究者になる夢をもっている。いや、絶対に夢を叶えるんだ。

実は、僕がこんなふうに夢を描けるようになったのは、一年生の時に口蹄疫被害にあったことがきっかけだった。それまでの僕といたら、何かにつけ人をあてにしたり、勉強ができないのを環境や家族のせいにしてたりして、ただ漠然と毎日を過ごしているだけだった。けれども口蹄疫の怖さや、家畜が殺されていくことの悔しさの体験を通して、僕は考え方が変わっていった。

「えらいことになったぞ、ケンシン。僕たちの牛にもう会えないかもしれないぞ。」

僕がのんきにマンガ本を開いている寮の部屋に、カズマが急に入ってきて話を切り出してきた。

「会えないってどういうことだよ。」

僕は、ただ事ではない何かが起こったのを、カズマの差し迫った表情から感じ取ることができた。

「僕たちの家畜の一头が口蹄疫にかかったかもしれないんだ。」

持っていたマンガ本を、僕は足元に落としてしまった。

学校の牧場には僕たちが名前を付けてかわいがっていた牛たちがいた。そのどれもが個性があってかわいい僕たちの大事な家畜だった。その頃、近隣の町で発生した口蹄疫は学校の家畜には関係のないものだと勝手に決め込んでいた。だって先生方は懸命に防疫をしてくれていたのだから。そしてあんなに先輩たちが消毒液を運ぶ作業をしてくれていたのだから。カズマの話が何かの間違いであってほしいと心の中で思うしかなかった。その時

はまだわずか一頭の感染の悲劇がどういふものか、一年生の僕にはわからなかった。

次の日、寮でも学校でも口蹄疫のことで話題は持ちきりだった。もう授業どころではない。勉強も全く手につかなかった。

そして、噂は現実になった。口蹄疫が僕たちの大事な家畜の一頭に感染したことを、体育館に集まった全校生徒の前で校長先生が沈痛な面持ちで教えてくださった。悔しいと何度も何度もおっしゃった。

先生方の必死の防疫でも強いウイルスを防ぐことは出来なかったのだ。廊下ですれ違った肉牛班の女子の先輩たちは、目を真っ赤に泣きはらしながらうつぶき加減で歩いていた。

それから、登校以外、寮からの外出を極力控えるようにとの知らせが来た。僕たちは、どうすることもできない歯がゆさや、週末に家族に会えない寂しさを抱えながら、何をしていいのかも分からない、そんな時間を過ごすことになった。

「口蹄疫に感染していてもいなくても、そして、たとえ生まれたばかりの子牛や子豚であっても、一定の区域内で飼っている家畜のすべてを処分することが法律で決まっているんだよなあ。」  
とカズマがぼつりとつぶやいた。

僕は口蹄疫の見えないウイルスの怖さや、今、生きている牛や豚を処分しなければならぬやるせなさに、ただ茫然とするしかなかった。

口蹄疫発生直後から、もう学校内の牧場には入ることはできなかった。ただ、消毒のために石灰で真っ白になっている牧場の風景ばかりが目についた。実習の授業さえも教室で受けた。

「カズマも元気ねえな、僕もだけど。」

お互いにその程度の会話を交わすくらいしかできなかった。

牛や豚たちと触れ合えないことがこんなに寂しくつらいことなのか、と学校生活自体がつまらなく思えてきた。あんなに賑やかだった牧場は、息の根を絶たれた悲しみの場所だ。勉強もうまくいかず、家畜たちもいなくて、何のために農業高校に入学したのかわからなくなった。それでもこんな僕たちに、先生たちは何度も防疫の必要性や口蹄疫を知ることの大切さを親身に語り続けてくださった。

そんな中、口蹄疫の支援で全国から励ましのメッセージや千羽鶴などが学校に山ほど届いた。僕たちの苦しみを大勢の人たちがこんなに關心をもって励ましてくれていたのだ。カズマや他の友達もメッセージをワイワイ言いながら読みあっている。

「みんなの笑顔見たの久しぶりだな。」

先生もそう言いながら笑っている。

「宮崎の高校生たち、牛たちの命を無駄にすることなく、頑張ってください。」、「若い高校生が頼りだよ。」といった応援メッセージに目を覚まされた感じがした。そして、たどたどしい文字で一生懸命に書かれた幼い子どもからの手紙と、かわいらしい子牛の折紙の作品を見たときには、さすがに目頭が熱くなった。僕は、なぜやる気もなくしていたのだらうと恥ずかしくなった。

口蹄疫の終息宣言が出されてからのある日、僕たちの学校に雌牛がプレゼントされた。贈り主は山形県の佐藤畜産の社長さんだった。佐藤社長は児湯郡の競り市で購入された雌牛を、口蹄疫の復興のために僕たちの高校にくださったのだ。大事な命を僕たちに委ねてくださったのだ。静まり返った牛舎に力強い牛の鳴き声と温かな命の鼓動が戻ってきて、僕たちは手放して喜んだ。学校全体が一気に活気づいた。僕たちは失った時間や命を取り

戻すつもりで、責任をもって一生懸命世話をした。餌の用意、牛舎の掃除、牛の健康状態の把握や牛を洗う作業、どの場面でも仲間の眩しい笑顔が一緒にあった。カズマだってきつい作業なのに自然に笑みがこぼれている。

翌年の春、僕たちに新たなエネルギーをくれる出来事があった。その雌牛が子牛を産んだのだ。

「カズマ、子牛の目ってこんなにかわいいんだっけ！」

「ケンシン、お前を見てるじゃないか。早くミルク、ミルク。上手に飲ませろよ。」

「まかしとけて。」

子牛にミルクを与えながら、僕たちは笑顔になったし、何より元気が出た。子牛は僕たちの復興に向けての希望の星となったのだ。

それから九か月が過ぎた。いよいよ僕たちが育てた子牛を競り市に出す日がやってきた。僕たちにとって、口蹄疫が起こってから最初の競り市だったから、とても緊張していた。競りのゆくえがどうなるかと固唾をのんで見守っていると、僕たちの牛を競り落としてくれたのは、あの山形の佐藤社長だった。佐藤社長は二回も僕たちに手を差し伸べてくれたのだ。僕は、恥ずかしさも忘れてカズマや仲間や先生と泣きながら抱き合って喜んだ。こんなに温かくていとしい命を僕たちは口蹄疫なんかで絶対に途切れさせてはいけない。佐藤社長と固い握手をしたり歓声をあげたり、お互いもみくちゃになりながら、僕の中に、ある決意が固まった。



現在牛たちは約五十頭となり、牧場にかつての活気がみなぎってきた。毎朝の早起きと牛たちの世話なんて、全く苦にならない。あの頃の静まり返った牧場を思うと、今とても充実している。この牧場から家畜が失われるようなことには二度としたくない。

それから僕は、勉強にも身が入るようになった。口蹄疫がどういふものなのか、どんな怖さがあるのか、その予防法はどんなものがあるのか、どんな法律によって家畜たちが守られているのかなど、わかったこと、まだわからないことがいっぱい見つかった。だから学びたい。僕は、犠牲になった命のためにも学ばなければならないと思っている。

今年の夏休み、東日本大震災復興のボランティアにカズマたちと行く。僕たちが、立ち上がることができたのは、心あたたまる応援メッセージやたくさんの方々の方々の支えのお陰だった。だからお礼を伝えたいんだ。

「ありがとう。」と。

僕が教室の窓を開けると、命の眠るひまわり畑の丘に「ひゅーっ」と爽やかな風が吹き抜けていくのが見えた。黄色に輝くひまわりたちは宮崎の太陽の光を一身に浴びて、まっすぐに前を向いていた。

## 今、あなたにできること

「今、あなたにできることは何ですか？」

私は、車の運転ができません。私には、人に分けてあげられるお金もありません。私は、普通の高校生です。でも、無力ではありません。私は、考えて行動することができます。

一年前、宮崎県で口蹄疫が発生し、街のあちこちが白い石灰で覆われました。私が学ぶ高校の敷地内にも、牛や豚が飼育されていました。毎日、正門前で車両消毒作業をされている先生方や先輩方の姿を見て、何もできない自分が歯がゆくて仕方がありませんでした。

そのような中、食品化学科の先輩方から、

「口蹄疫で苦しんでいる農家の人たちのために、ビスケットを製造し、販売した売上金を義援金として提供しよう。」

という提案がなされました。私は、初めて人の役に立てると思い、その活動に参加しました。他にも多くの友達や先輩方が参加し、自分と同じように感じている人がたくさんいるのだと嬉しくなりました。入学したばかりの私たちは、どのようにビスケットを製造するのか分かりません。先輩方に尋ねながら、美味しいビスケットを焼き上げることができました。そして、自分たちの気持ちが伝わるようにとメッセージを書いたラベルをビスケットの袋一つ一つに丁寧に貼り付けました。

「口蹄疫で大変な中、少しでも力になりたいと思い、義援金活動をしています。今、私たちができることをやっています。」

五月末の土曜日、町内でビスケットを販売することになりました。最初は、

「本当に売れるかな。」

と不安な気持ちでいっぱいでした。けれども、たくさんのお客様に買っていただき、中には、

「お釣りはいらさないから義援金の足しにしてください。」

と言ってくださる方もいました。

「口蹄疫で被害を受けた人たちのために何かしたい。」

という皆の思いをビスケットという形にすることができたことで、私は、こんな自分でも人のために役に立てるのだという自信をもつことができました。

やがて、口蹄疫も収まり、宮崎県が少しずつ元気を取り戻してきた矢先の一月二十六日、今度は新燃岳が噴火しました。噴石や灰が大量に降り、私が暮らす町は、空も地面も灰色に染まりました。火砕流や土石流から身を守るため、親戚やクラスの友達は避難所での生活を強いられました。私は、いてもたってもいられず、

「またビスケットを作って避難所に届けよう。また義援金も集めよう！」

そう思いました。しかし、そのことを相談した先輩から返ってきた言葉は意外なものでした。

「避難所の人たちは、本当にビスケットを必要としているのか？」

「お金を必要としているのか？」

「おまえは実際に避難所に行ってみたのか？」

先輩は、これまでもボランティア経験が豊富で、口蹄疫支援ボランティアでもリーダー的な存在でした。

避難所までは、学校から自転車で十分ほどの距離でした。行ってみると、ホールや廊下は、毛布を敷いて不安な時間を過ごしている人たちであふれかえっていました。

小さな子どもからお年寄りまでが騒然とした中に身を置くしかない状況でした。そして同時に、大量のパンやおにぎりが山積みになっていく光景が目に入りました。噴火から一週間、すでに様々な支援物資が全国から届けられていたのです。避難所で必要とされていたのは、物やお金ではありませんでした。



私は、それから約二週間、放課後になるとクラスの友達と毎日、避難所に通いました。最初のうちは、役場の方やボランティアの方に声をかけていただきながら、支援物資の分配やトイレ掃除などを手伝っていました。三日ほど経つと避難所で生活している方々とも顔見知りになり、

「それぞれの人にとってどのような支援が必要なのか。」

と少しずつですが、自分で考えて行動しようと思えるようになりました。そう考えると、自然に一人一人に目を配ることができるようになり、一人で避難生活をしているおじいちゃん、おばあちゃんの姿が気にかかるようになりました。避難生活に疲れ、一人寂しそうにしながらも、遠慮して人になかなかものを頼むことができない気持ち

が伝わってきたのです。私は自分から笑顔で語りかけるように心がけ、足が不自由なおじいちゃんに食事を運んだり、おばあちゃんの話し相手になったりしました。私の思い過ごしかもしれませんが、その後少しずつ、おじいちゃんやおばあちゃんの顔が明るくなり、話す声も大きくなったような気がしました。

その後も多くの出会いを通して、あれもこれもはできないけれど、一人一人が相手のことを考えて、自分の立場でできることをすればいいのだと気が楽になりました。

私は、被災した方々のために、ただ、

「何かしたい。人の役に立ちたい。」

という思いで、ボランティアを始めました。避難所では、これまでの当たり前の生活を失い、慣れない他人との共同生活からゆっくりと眠ることもできずに体調をこわすなど、皆さん心身ともに辛く大変な思いをされています。それでも笑顔で

「ありがとねえ。」

「ご苦労さん。」

「お陰で元気が出たよ。」

と言ってくれるおじいちゃん、おばあちゃん。実は笑顔をもらい元気づけてもらっているのは自分の方なのだということに気付きました。人の役に立ちたいと思っていますのに、自分の方が力をもらい、やりがいや喜びを与えてもらっていたのです。ボランティアとは、決して「してあげる」ものではなく、「人と人とのつながり」であり、社会や人のために尽くすだけでなく、自分自身を見つめ直し、成長できる、自分を変えることができるものだと改めて思いました。

三月、避難解除となり、噴火が少し落ち着いた頃、私たちは再びバスケットを作りました。今回は、販売するのではなく、昼夜を問わず、支援物資の取りまとめや被災者の支援にあたってくださっている役場の方々に届けることが目的でした。

「いつもありがとうございます。」とメッセージをつけて。



高校生の私にできることは限られています。けれども、何が必要か「見極め」、「考え」、「行動する」ことが  
できます。

小さなことから始めるボランティア。今後も自ら考え行動を起こしていききたいです。

「今、あなたにできることは何ですか？」

## ダブルプレー

「頑張っていこー！」グラウンドに元気な声が響く。

昇はこの春、高校に入学した。同じ中学校出身の人が少ないので少し不安だったが、中学校で三年間続けた野球部に入ることには決めていた。幸い同じクラスの浩二が入部してきたので、クラスでの仲間も見つけることができた。二人はともに内野手で、よき競争相手になりそうだと思はれた。浩二は色々な守備位置を守ることができたので、早くもチームの中で大切な存在になっていた。

しかし浩二は、五月に入ると練習をすべて休み始めた。先輩達の数人は怒っていたし、昇も気になっていた。ゴールデンウィークが明けたある日、監督から、県内で流行し始めた口蹄疫という家畜の病気のことと、浩二の家が畜産に携わっていて、予防のための消毒作業を手伝っていることの説明があった。監督を囲んで重い空気が流れたが、「俺たちも頑張ろう。」という主将の声で練習は再開された。

「大丈夫か。」

「迷惑掛けてすまん。」

次の日の朝、昇が声をかけると、浩二は短く答えた。

ニュースで耳にしていた口蹄疫は、昇にとってひとつではなくなった。いつのまにか父が読んでいる新聞の『畜産農家』『消毒作業』の文字に目がいく。夏の大会が迫ってもすぐに帰っていく浩二の後ろ姿が頭に浮かんだ。

大会当日、何とか背番号をもらえた昇は、ベンチの中でバットの片付けや伝令などを精一杯やった。惜しくも敗れたが、終盤には代走に起用され、少しだけ選手として野球場の土を踏むこともできた。

浩二は背番号のないユニフォームを着て客席のファウルボールを黙々と拾っていた。この日は浩二の父親も観戦に来ていた。父親と話すときの浩二は少し照れている様子で、見ている昇も思わず笑顔になったが、ふと不思議に思った。「もう家の方は大丈夫なんだろうか。」

試合が終わったあと、昇は浩二に家のことをきいてみた。

「あとで話す。」

と言った浩二はある日、厚い封筒を持ってきた。

中には円らな瞳の牛の写真がたくさん入っていた。昇は

浩二の家で飼っていた牛の数に驚いた。浩二は得意げに

「こいつが生まれた時、俺も手伝ったんだ。かわいいだろ。」

などと一頭一頭のことを楽しげに話した。

しかし、最後の方は空っぽの建物の写真ばかりだった。浩二の顔が陰しくなった。

「牛は？」

「もういないんだ。何でかわかるか。」

「病気にかかったのか。」

浩二は首を横に振って、

「いや。うちの牛は最後まで元気だった。この白いの、消毒用の石灰。消毒も、これでもかというくらいした。」



一生懸命世話してきたから牛も強かったと思う。体が強くなるようにえさとかも工夫してたし。でもな。」

「でも？」

「うちの町に病気が来たから、まわりの町にうつらないようにうちの辺りの家畜は全部処分されたんだ。俺は見せてもらえなかったけれど、注射する人たちが二回来た。最初来たときにワクチンで、次が殺処分だって言った。」

ここで浩二は大きく息を吐き、ぼつりと言った。

「うちがずっと育ててきた牛がみんな……。もうね、悲しくて涙が止まらなかったよ。」

昇は言葉がなかった。しばらくの沈黙のあとで、

「ワクチンでもだめなのか。」

なんとか一言、聞いてみた。

「病気がうつっても広がらないようにはなるらしいけれど、ウイルスを体に入れてしまうから、病気にかかったのと同じ扱いになってしまうみたいなんだ。それで結局『殺処分』だって。うちの牛も。」

「処分って、生きてるのに。」

「なんだかね。最後は市場に出すために飼っているんだけど、うちでずっと一緒に生きてるからね。家族みたいなもんだよ。いまでも悔しいよ。でも、宮崎や日本の畜産を守るためには仕方がないんだよ。」

浩二は、奥歯をかみしめるように言った。

浩二がグラウンドに帰ってきた。快音がグラウンドに響き、すぐにドッとグラブに収まる音がする。夏休みに入り、チームは新人戦の練習に入っていた。

「また練習に参加します。よろしく願います。」

浩二の復帰をみな快く、

「おかえり。」

と迎え入れた。

昇は浩二の家がどうなるのか気になっていた。浩二が監督に、

「いつかまた牛を飼う予定です。」

と話すが聞こえた。昇は直接聞いてみた。

「牛を飼うって言ってたけど。」

「そうなんだ。そう決めたんだ。」

あれだけ辛い思いをしたあとだ。続けられなくなっても仕方がないとも思える。しかし浩二ははっきりと言った。

「父ちゃんは、じいちゃんがしてきたことを、ここで終わりにするわけにはいかないって言ってる。やめる人もいるけど、続ける人も多くなって。なんだかんだいっても、俺の町は日本の畜産を支えているからなあ。将来のことはまだ決めてないけど、あとを継いでみようかな。」

畜産のことを生き生きと話す浩二を見て、昇もうれしくなった。

浩二の家が育てる牛は、きっと日本のどこに出してもおいしいと言われるだろう。そう考えると、自分たちの住む町が誇らしく思えてくる。浩二は町を盛り上げる気持ちをもっている。

自分は どうして どうか。

「今度は僕が考える番だな。」

キーン!

「昇ிட்டたぞ。」

二遊間に転がるボールをグラブの先で捕らえ、そのままベース上の浩二にグラブトス。浩二はランナーをかわしながらファーストへナイススロー。二人の連係がうまくいった。ダブルプレーだ。雲がたちのぼる青空のもと、二人は成功の合図を交わした。



## 作成協力者

梅 木 丈 裕  
日 高 鶴 世  
永 井 智 子  
岩 切 隆 人  
田 原 理 恵  
宮 本 伸二郎  
山 下 久見子  
首 藤 ゆ み  
吉 田 弘 志  
西 村 浩一郎  
恒 松 秀 明  
馬 場 康 年  
畑 中 研 二  
高 森 賢 一

国富町立木脇小学校 教諭  
川南町立東小学校 教諭  
新富町立上新田中学校 教諭  
小林市立南小学校 教諭  
都城市立西中学校 教諭  
日向市立平岩小学校 教諭  
日向市立大王谷中学校 教諭  
宮崎県立延岡青朋高等学校 教諭  
宮崎県立門川高等学校 教諭  
宮崎県教育庁中部教育事務所 指導主事  
宮崎県教育庁南部教育事務所 指導主事  
宮崎県教育庁北部教育事務所 指導主事  
宮崎県教育庁学校政策課 指導主事  
宮崎県教育庁学校政策課 指導主事

### 【挿絵協力】

椎 俊 一  
大 西 克 憲  
亀 川 重 美  
阿 部 健 二  
黒 木 ひとみ  
山 崎 智 司  
黒 木 弘 恵  
児 玉 理 菜  
黒 木 茜  
崎 田 茂 樹  
金 子 文 雄

宮崎市立東大宮中学校 教諭  
宮崎市立生目南中学校 教諭  
宮崎市立生目台中学校 教諭  
都城市立姫城中学校 教諭  
日向市立平岩小学校 特別支援教育支援員  
日向市立大王谷中学校 講師  
椎葉村立椎葉中学校 教諭  
都城市立西中学校 3学年  
宮崎県立延岡青朋高等学校 1学年  
宮崎県南部福祉こどもセンター主査  
宮崎県教育庁学校政策課 主幹

※ 所属は平成24年度現在

「命や絆を大切にする」  
宮崎県道徳教育読み物資料集

編集／発行 宮崎県教育委員会  
〒 880-8502  
宮崎市橋通東1丁目9番10号  
宮崎県教育庁学校政策課  
電話 0985-26-7239  
FAX 0985-26-0721  
平成 25 年 3 月 1 日発行

\*本書は、道徳教育総合支援事業（文部科学省）  
の委託を受けて制作しました。

